ぴんくの魔女 ～お店はじめました～

ねむねむネムコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぴんくの魔女　～お店はじめました～

【Ｎコード】
Ｎ０１４６Ｗ

【作者名】
ねむねむネムコ

【あらすじ】
「おまえも十四。店を一軒あげるから、そろそろ独り立ちしなさい」
その祖母の鶴の一声で家を放り出されたサララは、後ろで泣いている父親を尻目に、使い魔のシャルペロとダンジョンの町にやって来た。
現在魔女のお店準備中。

家業は魔女だが適性はあくまでも商人の彼女が、ピンクでふわふわな見た目を裏切るガッチリさで頑張るお話。

《読みにくいとの指摘をいただき、行間を整理。内容も少し手直ししました。十一月二十二日修正終了》

はじまりの町　1（前書き）

魔女と魔法使いの違いってなんでしょう。

あと魔導師とか魔術師とか…。そういうのがわかってないまま書いています。

まあ、細かいことは気にしないでください。

はじまりの町　1

《そろそろ起きなよー。いつまで寝てるのさ》

荷馬車の荷台に腰を降ろした姿勢で揺れに身をまかせ、いつの間にか私は眠っていたらしい。使い魔のシャルペロに起こされて、気がついた。

手加減しているようだが、それでも膝に刺さる猫の爪は鋭くてチクチクと痛い。目を開けると、こちらを覗き込むおひげのぴんぴん生えた逆三角形の顔があった。

「…痛いよ。シャルペロ」

《ああ、ごめん。でもさ、この揺れでよく寝られるよ。サララって案外図太いよね》

舗装されているとはいえ、石畳の路面は所々悪くなっていて平らとは言えず、何より荷を積む前提で作られている荷馬車には快適性は求められていない。

つまり乗り心地は決して良くはない。はっきり言うならば、酔わないのがおかしいくらいに揺れている。その荷馬車の荷台で私は熟睡していたわけだ。

シャルペロの呆れた口ぶりには、私も返す言葉もない。しかし普段から私がこんな寝汚いふうな言われようには、はっきりと反論したい。

十四になったのを区切りに自立の道を踏み出した以上、この程度で

愚痴るのは情けない。そう思っているから口にしないが、私はけっこう疲れている。

目的地まで歩かなくて済むのはありがたいが、長時間荷台で揺られているのも疲れるのだ。しかもそれが連日となると疲労も溜まるのは当たり前だと思う。

生まれ故郷を出ての一人旅……正確には一人と一匹旅だけれど、歩きで進むのは不安というより、はっきりと無謀だ。

当然、大きな町では乗り合い馬車を乗り継ぎ、馬車が出ていない小さな町ではギルドを介して相乗りさせてくれる商人などを探して、ここまでやって来た。

猫連れということで乗車拒否をされたり、雨のせいで足止めを食ったり、足下を見てぼろうとする質の悪い業者とやり合ったりと乗り継ぎのロスを含めたここまでの道のりは本当に長かった。

日数にして十三日。どうしてこんなにかかったんだろうと思い返すと、正直ぐったりする。しかしようやく目的地である〈はじまりの地〉にやって来たのだ。

《サララ。見えて来たよ》

シャルペロの声に前方を見ると、巨大な城塞にぐるりと周囲を囲まれた大きな町が正面に見えた。いや、正確にいうなら塀が大きすぎて町は見えない。あまりの大きさに呆然と見入っていると荷馬車の持ち主のおじさんが声をかけてきた。

「ああ、起きたかい。ほら〈ダンジョンの町〉が見えてきたよ」

《ほんとは〈ガト〉っていう名前があるんだけどね。…まあサララたちには〈はじまりの地〉というほうが馴染みがあるよね。》

うちのばーちゃんがこの町の出身だというのは、小さな頃から繰り返し聞かされている話だ。しかし想像していたよりも大きな町だった。町を取り囲む城塞の規模には、かなり驚いた。ぽかんと眺め入る私をおかしそうに見ながら、おじさんが説明してくれる。

「大きい町だろう。ここはダンジョン目当てに、冒険者や商人やらが集まって出来た町だからなぁ。そりゃあ、にぎやかだぞ」

町の大きさもだけど、それを囲っている石塀が尋常じゃなかった。これはどこの要塞かと聞きたくなるほど高く頑丈そうな造りで、まさに城塞というしかないその規模に思わず難攻不落なんて単語が浮かんだ。話には聞いていたけれど、これは町というより都市規模の防備だ。

《ふふふ。おじさんてば、自分が町を大きくしたみたいな顔して言ってるよ》

「おやおや。本当によく鳴く猫だね。しかし猫を連れての旅なんて大変だろう？猫ってやつは、犬ほど言うことを聞かないしなぁ」

《失礼だなぁ。ボクは猫じゃないよ》

使い魔の誇りが傷ついたのかシャルペロは怒りだしたが、そもそもが猫の姿をしているんだから仕方ない。猫の姿をしていたら、誰だって普通は猫だと思うだろう。まさか猫の姿をしたお使いとは思わ

ないだろう。

実際にシャルペロの言葉がわかるのは契約者の私だけなのだ。他の人間にはニャアニャアとしか聞こえない筈だ。

そうこうするうちに、城門が見えて来た。入口に立つ門衛の姿が目に入り、私は姿勢を正した。

はじまりの町　2

「ああ、お嬢さん。手形は持ってるな？」

荷馬車の持ち主のおじさんが声をかけてきた。もちろん持っている。小さい町や村ならともかく、こういう大きな町では出入りのチェックは厳しいから当たり前だ。それ以外にも場所によっては関所が設けてあるし、遠出をするなら手形は必須だ。

特にこの町にはダンジョン目当てで人が集まり、お金や物が動くから、治安維持のためにも身元の怪しい者は入れてもらえない。……まあ抜け道はいくらでもあるんだろうけど、建て前はそうなっている。

城塞の入口が近くなり、門の両側に立つ門番の姿がはっきりと見えて、私は思わず首を傾げた。

うん、すごく重そうだわ。頭は出てるけど、あの鎧は動きにくそうだ。普通門の番人というと下っ端の兵士が立ってるものなのだけど、(違うのかな？よくわからないわ) この町の門番さんは騎士だった。

遠目にずいぶんとキラキラしているなーと思っていたら、なんと全身鎧を身に着けていたのだ。

番人としての威圧感を出すにはその姿はいいだろうが、夏場とかは色々と大変そうだ。冬場も冬場で冷えたりして辛そうだが、大丈夫なんだろうか。

思わず余計な心配をしたが、立っているのはまだ若い騎士と多分べ

テランであろう年輩のおじ様騎士の二人組だった。おじ様は若い方のお目付というか指導役でしょうか。

この町は王家直轄地のため騎士団が常駐していると聞いていたけれど、いきなり遭遇です。田舎出なんで騎士様なんて初めて見ました。

若い方の騎士様は私の示した手形をちらりと見ただけで、すぐ門を通してくれた。神殿発行の手形はもちろん正規の物なので、なんの問題もないのは当たり前だけど、思っていたより緊張していたみたいで私は吐息をついた。

とにかく無事に町には着いたけれど、おじさんが商工ギルドに向かうというのでそのまま荷馬車に乗せて行ってもらうことにした。

荷台に乗ったまま町の様子を眺めて確認したが、やはり〈ダンジョンの町〉というだけあって一般に生活している人よりもダンジョン目当ての一発当ててやろうという感じの堅気じゃない人の姿が目についた。

それらの客を当て込んだ商売の店も多いようだ。ここは大きな通りだからそういった施設や店が目立つのかも知れないが、とにかく賑やかなのはわかった。

こういう言い方をすると思うところがあるように聞こえるかも知れないが、私に他意はない。その人たちを頼りにここで生活していこうかと決めているので、むしろいないと困るのだ。

そして荷馬車に揺られてやって来た商工ギルドは、石造りの大きな建物だった。大通りにこれだけの場所を取るのは地代の無駄じゃないのかと思ったが、受け付けにいたおじさんの話では、ここは問屋

も兼ねているという。

ギルド員割引が利くそうなので、これから有り難く利用させていただくことにした。これでも組費を払っているのだ。元は取り返さなくては。

中に入って受け付けのおじさんと話していると、奥から小柄な恰幅のいいおじさんが出て来た。その身なりから偉いさんとわかるが驚いた。白髪混じりの髪から覗く耳が尖っていたのだ。立派な髭や背丈。体型から見てドワーフなのかも知れないが、初対面なのにずいぶん愛想がいい。ドワーフは偏屈と聞くから、この人は混血かも知れない。

「やあ、君がサララだね。私は支部長のアインだ」

懐かしむような目で、しばし支部長さんは私を見ていた。

「カテジナは元気かい？」

なるほど。たかだか成人前の小娘に偉いさんがなんの用かと思ったら、彼は祖母の知人らしかった。

「はい。元気です。いまだに自分で山に入って、薬の材料を採ってきています」

「ふむ。カテジナの魔法薬か…。懐かしいな。彼女の作る魔法薬は評判がよかったよ」

支部長さんは祖母が町にいた頃の話を少しして、私に古びた鍵を差し出した。その鍵は、祖母が町を離れる時に管理をギルドに委託し

ていった家のものだった。

「これが君の家の鍵だよ。管理はギルドでしていたから荒れてはいないが、多少の埃は覚悟してくれよ」

最低限の管理はしてくれてはいたようだが、あとで家の中を確認しなくてはならない。きちんと管理費は支払っていたから当然の要求だ。

「場所はわかるかね?」

なくさないように鍵をしまっていると支部長さんに聞かれた。

「いいえ」

祖母がこの町を出て以来、うちの身内は一度もここには戻らなかった。この町は家族の根源ではあるが、全く見知らぬ場所なのだ。見知らぬ場所に立っていることを今更のように実感して、急に気持ちが怖じ気づきそうになった。

本当に今更だ。一人でやっていくことは不安だが、来てしまった以上は実家に逃げ帰るなんてありえないのに。

身一つで放り出されたわけじゃない。自分には考える頭もそれなりの技術もあるし、なんとでもやっていける。ここが私にとっての《始まりの地》になるのだ。

迷いを振り切ると私は支部長さんに頭を下げた。細かい地理などは追い追い覚えることにして、当座の生活に必要なことだけでも聞いておくことにした。

はじまりの町　3

新しく住む私たちの家は、ダンジョン探索に欠かせない品々を扱う商店が立ち並ぶ、通称ミゼット通りの一角にあった。本通りから一本外れただけの商工ギルドにも近い優良物件。場所的には一等地だ。

駆け出しの小娘が、いきなりこんな場所でお店をだしていいのだろうか。少しのあいだ逡巡したものの、時間がもったいないので頭をすぐに切り替える。

「うーん。思っていたよりはマシね。埃さえなければだけど」

手荷物を置くのももどかしく、私はざっと家の様子を見て回った。

少しの埃は我慢しろ？支部長さん。これが多少ですか。思わず唸るほど、中は埃だらけだった。これで管理していたと言われても納得がいかない。しかし文句はひとまず置いて、家の中を見て回ることにした。

家の作りは中庭付きの一戸建てで、一階が店舗と台所と物置と土間。トイレになっており、二階部分が住居だった。

「このスペースはもったいないなぁ。薬を調合するにしたって広すぎるわよ」

普通に商売をするならともかく、私は店舗を客に解放するつもりは

ないので、店舗部分が無駄に広いのが気になった。
ダンジョンに出入りするような人間を相手に商売するのは、正直なところ不安だ。なかにはゴロツキの類いもいるだろうし、小娘相手と見て増長する客だっているだろう。下手をして居座られたり、暴れたりされないとも限らない。かつて祖母がしていたように、入口横にある窓から客に応対するのが正しい方法だろう。
うちが扱うのは薬がほとんどなので問題はない。と思う。まあ不備なところは、やっていくうちに変えていけばいい。
しかし一階のほとんどをとっている店舗スペースが、本当にもったいない。祖母はここを薬の調合場所に使っていたようで、石の作業台や古い器具がいくつか置かれたままに埃を被っている。
建物の外装が年月のせいで古ぼけているのは仕方ないが、先にギルドへ連絡をして頼んでおいたので、傷んでいた箇所に関しては既に補修済みだ。
どうせなら掃除もしておいてくれたらよかったのに、かまどとか、本当に直した部分だけしか埃を払ってないのが腹立たしい。
唯一ありがたいのは、中庭の井戸だ。外に汲みに行かなくて済むのは助かる。元はつるべ式だったが、体が小さく筋力のない私には、つるべでの水汲みはきついので頼んでポンプ式に換えてもらっておいた。
欲をいうなら内壁も塗り替えたいところだったけれど、壁の変色なんて住むぶんにはなんの問題もない。見栄えが悪いくらい我慢出来る。なによりこれ以上借金を増やすのはごめんだ。

そう借金。開店準備を進める際、私は十四にしてはけっこうな額の借金を背負ってしまっていた。

もともと十二から商売を始めた私だが、それは親の軒先を借りていたにすぎない。祖母や両親の店に自作の薬などを置かせてもらって、売上の一割を納めていたのだ。当初こそ失敗もあったが、最近は評判もよかった。そこに家長である祖母が鶴の一声。

「魔女は十四で独り立ちするもの。お祝いに店をひとつあげるから、そろそろ出て行きなさい」

祖母には誰も逆らえません。ちなみに父は婿養子です。〈魔女の店ダンジョンの町支店〉の開店が決定した瞬間でした。

私、一般的な成人の十五歳になる前に送り出されてしまいました。

ちなみに魔女を継ぐのは女だけ。男は魔女にならないので、兄はハタチ過ぎても家に住んでいます。

縁ある地とはいえ成人してない私を一人で送り出した家族は、陰でご近所に鬼のように言われているらしい。魔女は十四で独り立ちするって風習、一般的には知られてないからなあ。

そういうわけで祖母のものだった店を貰ったのだが、そのあとが大変だった。

祖母が町を出る際に、現地の商工ギルドと契約して建物の維持管理を頼んではあったものの、家というものは住んでいないと荒れるもの。地元の商工ギルドから連絡してこちらの様子を調べてもらった

ら、やはりあちこち傷んでいるとの話。
それで連絡を取り合いながら、直してもらうように頼んだら……見積もり書を見て目を剥きました。はい。

祖母が用意してくれたのは店一軒。小娘には過分なものだけれど、それを維持する費用や運転資金や地代や税金は当然私の自腹だ。そこへさらにギルドへの月々の返済が加算されるわけだ。

いっそ小さい店舗を借りた方が家の税や地代を払わなくて済むぶん楽だったのかも知れないと、こっそり泣いたのは内緒です。

とにかく当初の私の希望通りに家を直そうものなら、月々の出費はとんでもなく膨れ上がり家計を圧迫するのは必至。まさしく火の車。いや全身火だるまで私自身が転げ回ることになるのは目に見えていた。

運転資金である貯えは、商売を始めて二年程度で貯めたささやかな額に過ぎない。あっという間に底をつくだろう。

こっそりと父が手渡してくれた虎の子のお金には、なるべく手を付けたくないし、我が家の家訓は《身の丈にあった生活を営むべし》

いつか余裕が出来たら、きっと改装してやろうと涙を飲んで、最小限の補修に留めてあきらめた。

そうしてやって来たら、この有様ですよ。泣きそうだ。

《サララー。すごく埃っぽくて、鼻がムズムズするよっ》

私があれこれと考えているとシャルペロが足元で騒ぎだした。

「今から掃除するわ。とにかく片付けないとどうしようもないわね」

《サララ一人で片付くの？　これ》

猫の姿のシャルペロは、当然この場合は役に立たない。そもそもシャルペロが役に立ったことなど一度もないのだけど。

「片付けるのよ！　さっき支部長さんに頼んでおいた荷物が届くまでに、ある程度なんとかしないと置き場所すらないわ」

当座の敵はこの埃と蜘蛛の巣だ。

「ほらほら。あんたは中庭でひなたぼっこでもしてなさい」

《あんな草だらけじゃ、寝る場所ないよ》

「なら屋根に上がってなさいよ。きっと風が気持ちいいわよ」

邪魔なのでぼやくシャルペロを追い立てて、私はざっと掃除をしてしまうことにした。

はじまりの町　4

今使っている掃除道具は、さっきギルドへ寄った際に買ったものだ。仕入れ価格なので店で買うより安いし、買いに出る手間が省けたのはありがたかった。

しかしぐるっと部屋を見回せば、ため息しか出ない。とてもじゃないが掃除しきれるとは思えなかった。明日も一日中掃除で潰れるだろう。

「旅をしてきて、すぐに掃除って…きついわ」

《ねえ。やっぱりなんかしようか？》

「うーん。ありがたいんだけどね」

ありがとうシャルペロ。猫の手も借りたいところだけど、君の手は本当に役に立たないからいりません。ごめんね。かわいいけど、ホウキを口にくわえたって掃けないでしょ。悪いけど邪魔だわ。

「大丈夫よ。さっさと済ませるから」

掃除道具の他にも、さっき色々と買っておいたのだ。配達を頼んだそれらが届くまでに、なんとか場所を空けておかないとならないから忙しいのよ。

荷物の置き場所と寝室を最優先で綺麗にすることにして、とにかく時間がもったいないので手を動かす。はい。どいてどいてー。

そうして掃除だ掃除と始めた私でしたが、すぐに閉口した。シャルペロの言う通りに埃の量が尋常じゃありませんでした。はい。一体どれだけ積もってるんだろう。信じられない。

地層のようにこの量の埃が降り積もるには、どれだけの時間がかかるんでしょうか。想像を超えています。

ギルドの人はときどき風を入れたりはしてくれていたようだが、掃除は全くしてなかったようだった。これでよく管理していたと言えるものだ。片腹痛いわ。金返せっ。

住みもしないのに安くはない維持管理費用を毎年きちんと祖母が払っていたのだよ。それなのに、なに？　この有様は。しっかり金だけ取っておいて、これは酷すぎるでしょう。怠慢ですよ、支部長さん。

中庭も草だらけだったし、許すまじ商工ギルド。

「うひゃあー」

思わずそろそろ年頃の娘らしからぬ奇声が出てしまったが、勘弁して欲しい。埃と一緒にミイラ化した虫の死骸がゴロゴロと出て来るのだ。

「また出たー」

《サラー。涙目になってるよ》

当たり前でしょ。いくら虫が平気でも、こんなの見たら泣くわっ。それでも泣きそうなのを我慢してハタキをかけたり、掃いたりして綺麗にしていく。

しかし酷い荒れようだ。ざっと見たときは、ここまでとは思わなかった。

人に貸しておいたら、維持も出来るしお金も入って一石二鳥だったのにそうしなかったことから、うちのばーちゃんのこの家への思い入れはよくわかる。この有様を見たらば、きっと激昂するだろう。あとで手紙に書こう。逆上したばーちゃんに捻じ込まれるがいいわ。ふっ。

支部長さんもばーちゃんの知人なら、あの性格はわかっているだろうし。誠意を見せていただかなくてはね。

手が届かない天井にはった蜘蛛の巣を取るのは早々にあきらめて、私は一人頷いた。あれはギルドの人間にやらせよう。うん。

《ホントに片付くの？》

「片付けないと、どうしようもないでしょ」

見るとシャルペロが足元で顔をしかめている。ねえ。その顔コワイからやめてよ。

それで、なんでそんな顔してるのかと思ったら…。悲鳴をあげそうになった。

《ちぇっ。生きてたら、おやつになったのに。干物じゃなぁ》

虫どころか干からびたネズミが出て来たわよ。絶対にあとで抗議してやるー。というか、それ食べる気？　あんた自分のこと猫じゃないって言うけど、すっかり猫よっ。

《食べないよ。こんなの歯が欠けちゃうよ。》

「そんな問題じゃないわ」

歯がたつなら食べると？　君が遠いよ。シャルペロ。

「あとでなにか買ってくるから、食べないでよ」

《だから食べないって。こんな固いの》

固くなければ食べる気だったのか。いろいろ間違ってるわよ、あんた。

絶対にあとでギルドに抗議してやる。覚えておきなさいよ。

水に戻して食べるとか言われなくてよかったと思いつつ……泣きながら、私は片付けを再開した。

あんまり腹に据えかねたので、その日のうちに私はギルドへと抗議に向かった。そしてさっきも応対してくれた受付のおじさんに、用向きを告げた。

普通なら小娘がなんか文句つけてきたぞってな感じで、ぐだぐだとしたやり取りの押し問答で時間が潰れそうなものだが、わざわざ支部長さんが出て来て、私の応対をしていたのを知っているおじさんは腰が軽かった。こちらの話を聞くと、直ぐに調べるよう手配してくれました。

偉い人にツテがあると、こういう時に便利だなぁ。それで、ものの1時間ほどで事情は判明。早い早い。

待っているあいだ、私はギルドの商品の在庫と買い付けリストに目を通していたんですが、どうせ長々と待たされるんだろうと思っていたので、ちょっとびっくりした。

それで結論からいうとギルド側の手違いだった。支部長さんも出て来て平謝りされてしまった。

私の祖母カテジナがギルドと結んだのは、彼女所有の店舗兼住居の維持と管理に関する契約。内容は町を離れているあいだギルドが建物を管理下に置き、定期的に確認をし維持をするというものだった。

祖母カテジナは、契約に基づき相応の対価を支払っており、これは間違いなくギルド側の記録に記載されていた。それに対してギルドも契約を履行し、正しく管理はされていた。

それが何年か前に台帳を整理した際のミスから、祖母の家は維持管理対象リストから洩れたらしいとのこと。なにをやってるんでしょうか。

そしてそれ以降は最低限の管理しかされることはなかったようで、今に到ると…。つまり元の契約通りに金だけは取って、放置していたわけだ。

いまさらだが、きちんとギルドが管理していたなら、修繕費用はあんなにかからなかったんじゃないかと思う。もしかしてと。

ギルドのせいで増えた借金をギルドへ返済するために、これから私は馬車馬のように働くのかと思うと理不尽で泣きそうです。謝られたって、許しませんよ。

私が振じ込んだ結果、契約が中途から履行されていないということで、その分を返金してくれることになった。よかったね、ばーちゃん。家は傷んだけど、お金は幾らか戻るよ。

事情を知って怒り狂ったばーちゃんが、ギルドに乗り込む姿が目に浮かびます。うちの担当地区のギルドのおじさんの頭皮が心配だ。

ばーちゃんの活躍いかんでは、借金が軽減したりは流石に無理かしらね？

「それでしたら、祖母カテジナ名義のギルド口座に払い込んでおいてください」

「いや、対象資産はあなたに譲渡されたので、ギルドの返済対象は

あなたになります」

なるほど。ギルド側の契約者への返金の義務は、家が祖母から私に譲渡されたため私に移行したと。面倒だなぁ。

「それなら私の口座に入金後、あらためて祖母の口座へ移しておいてください」

すぐ私の口座から無くなるばーちゃんのお金なんて、興味ない。やっといてね。

さて慰謝料代わりに掃除人員を借りるにはどうしたものかと思っていたら、支部長さんが切羽詰まった顔で話し掛けてきた。

「サララ。カテジナには黙っていてくれないか」

「無理です」

そういうこと言いますか？　孫もいるような年の大人が？　お金は祖母には黙って、こっそり受け取っておけと？

いやいや。私が払ったお金じゃないんだから、祖母に返すのは当たり前でしょう。第一黙って私の懐にしまうには金額が大きすぎる。最初に返金総額の載った書面を見て、ちょっとびっくりしましたよ。軽く一財産だったから。

まあ、年間費用×年数の結果なのだから順当なものだけれど、金額の大小はこの場合には関係はない。私が即答すると支部長さんの眉毛が情けなく下がった。

「駄目かね」

「駄目ですよ。当然です」

支部長さんに泣きつかれても、これは譲れません。これから独り立ちしようという若者を甘やかしてどうするんですか。

というよりばーちゃんが恐いので、それは無理だ。

「…魔女は嘘を嫌います。あとで事情がわかったら、みんな支部長さんのせいになりますよ」

私をねじ曲げる者を祖母は赦さないだろう。これは嘘ではなく、黙っているだけだというのは詭弁だ。魔女は真理を体現するべきものだというのが祖母の持論だ。嘘がすべて悪いわけではないけれど、この場合は違う。

本業は商人だけれども、私は魔女だ。正直なところ借金も背負ってることだし、お金は欲しい。しかしこんなふうに入ったお金なんて所詮は泡銭だ。悪銭身につかずと昔から言うでしょう？

「見た目だけでなく、そういう頑固なところもカテジナそっくりだ…」

あきらめてつぶやいた支部長さんは遠い目をしていた。…祖母と支部長さんのあいだには、まるで二人の間には、かつて何らかの問題があったような口ぶりだった。まったく興味ありませんけどね。

はじまりの町　6（前書き）

9月6日、内容に魔法使いと魔女についての考察をいれました。

つじつまが合わなくなればまた変わるかも知れません。

はじまりの町　6

「イルクさん。よかったら手を洗って、お茶をどうぞ」

私は草むしりをしてくれている男の人――イルクさんに声をかけた。井戸と立ち木があるだけの中庭は、そう広くはないが先程まで見事に雑草だらけだった。それを彼がすっかり綺麗にしてくれたのだ。

「ありがとう。そうさせてもらうよ」

イルクさんはポンプで水を汲み出して手を洗っていたが、いきなり頭から水を勢いよく被り、ついでとばかりにガシガシと洗い流し始めた。

汗が気になったのだろうか？　急だったので、ちょっとびっくりした。けっこう大雑把というか、思い切りのいい人みたいだ。

しかしイルクさん。もしかして拭くものを持っていないのではありませんか？

ああ、やっぱり。腰のあたりをゴソゴソして諦めた。服で拭こうと思っているでしょう、あなた。それはやめなさい。草むしりと掃除で汚れているんだから。

大人なのに困った人だなと、すかさず私は、自分の手拭いを差し出した。

「……ああ、ありがとう」

イルクさんは少し迷って受け取り、その短く刈り込まれた赤い髪をゴシゴシと手荒にこすった。こういう時、短髪って便利だ。

この大雑把決定なお兄さんはギルドが寄越してくれた手伝いの人だ。片付けが大変だと支部長さんに訴えたら無料で貸してくれました。言ってみるものだ。

この人のおかげで片付けがおおかた終わった。

イルクさんは普段はギルドで事務をしているらしいが、上背がかなりあるうえにがっしりした体つきの人なので配送などの力仕事の方が向いているように見える。あくまでも私の勝手なイメージだが。

「こちらへどうぞ」

私はイルクさんをテーブルに誘った。イルクさんの体が大きいのでテーブルが小さく見えておかしい。

「どうぞ」

「ああ、どうも」

居心地悪そうにしているイルクさんの前にお茶を出すと、恐縮したようにカップに手を伸ばした。手が大きいのでカップも小さく見える。

「よかったら、こちらもどうぞ」

さっき買って来た甘い揚げ菓子を勧めると、イルクさんの口元がほころんだ。どうやら甘党らしい。

自分が食べたいものを選んでしまったけど、よかった。何処にでも売っているありふれたお菓子だが、小さい頃から好きで露店で見つけて、つい買ってしまったのだ。

小麦粉の生地を一口大の棒状にして油でカリカリに揚げ、糖蜜をからめたお菓子は歯ざわりがよく、素朴な味がする。

森の熊さんみたいに大きな体の男の人が、甘いものを嬉しそうに食べている姿って案外かわいいかもしれない。

ついまじまじと見ていたら、イルクさんが赤面して俯いてしまった。すみません。不躾でした。

イルクさんも大人なのに、こんな小娘相手に照れないでくださいよう。どうも内気なようです、この人。

「おかげさまで綺麗になりました。ありがとうございました」

「いや、もともと事務手続きでのミスが原因だからね」

それはもういいです。謝罪していただいて、返金手続きも済みましたから。補償手続きはまだですけど。

イルクさんにはその補償の調査も兼ねて、来てもらっているのだ。いや、この場合は掃除のほうがオマケだろうか？

「そういえば、看板はまだ掛けないのかい？サララだと届かないだろう。よかったら俺が掛けるよ」

祖母に作ってもらったのに、看板のことをすっかり忘れていた。

「助かります。掛けてもらえます？」

私は椅子から立ち上がると、鞄の中から包みを取り出してテーブルに置いた。包みを開くと中から一抱えくらいの大きさの、素朴な木の看板が現れる。

「これは…帽子？」

「ええ。魔女のお店だから帽子です。わかりにくいかしら」

今は誰も被らなくなって久しいけれど、魔女のトレードマークといえばとんがり帽子だ。たいていの人は魔女と言えば、とんがり帽子とホウキを発想するようだが、とんがり帽子はともかくホウキは魔女には関係がない。

そもそも魔女と魔法使いは全くの別物なのに世間では混同されている。ホウキで飛ぶのは魔法使いだ。魔女にはそんな芸当は出来ない。

語源からして全く違う赤の他人だ。

そもそも魔法使いは《魔力で魔法を使う者》ということからそう呼ばれているが、魔女の語源は魔法を使う女じゃなくって、《魔法のように怪しい術を使う女》ということらしい。

怪しい女って御先祖さま、一体どうしてそんな呼び名になったんだ？　と思うけど、事実なんだから仕方がない。ちなみに私も魔女だけれど、魔力なんてカケラもないから魔法も使えない。

魔女に見える人間がホウキで空を飛んでいたら、それは魔法使いだ。ホウキで空を飛ぶには、魔道具であるホウキを魔力で制御するしかないから、魔力を持たない魔女には無理なのだ。

魔力がなくても使える日用品の魔道具ならともかく、移動用ホウキなどの魔法具は魔力を使わないと作動しないため、魔法使い限定なのだ。しかも聞いた話では、ホウキは制御が難しくて、時々落っこちるらしい。

たとえ魔力があったとしても、そんな危ない物には乗りたくない。

どうして魔女に魔力がないと言い切るのかと聞かれれば、そういう血筋だからとしか答えようがない。

そもそも人間は魔力を持つ者が少ないのだから、仕方がないのだ。やはり妖精やドワーフと比べたら魔力の量も少ないらしい。だから魔法使いは魔力を薄めないため、同族内や魔力の有無で結婚相手を決めるらしい。魔法使いも魔女も、世襲というところだけが一緒なのだ。

魔女は魔法使いと違い結婚相手に魔力の有無を条件にはしないから、結果的に魔力を持たない。私はそう考えている。もしかしたら探せばなかには魔力を持つ者がいるかも知れないが、多分ほとんどいないだろう。

話を戻そう。とにかく、魔力のない魔女はホウキじゃあ飛べない。

いや、わざわざホウキに頼らなくても《小技》が使える魔女は飛べるのだけど、魔女と魔法使いが混同されたのは、その《小技》が使える魔女のせいだと思われる。

つまり、魔力で魔法を使うのが《魔法使い》で、魔力を使わず魔法っぽい《小技》を使うのが《魔女》だ。

しかし《小技》が使える魔女なんてほんの少しだ。

多くの魔女は、薬を作ったり占いをしたり産婆の仕事をしたりして生計を立てている。

そういう《魔女》であり、商いを生業としている私が言うんだから間違いない。

それから魔法使いと魔女の違いがあと一つ。魔女と違い、魔法使いは使い魔を持たない。いや、魔法使いが使い魔を持ってしまったら、魔法使いじゃなくなると言うべきだろうか。

もし魔法使いが使い魔を持つことができたなら、それは《精霊使い》と呼び名が変わるのだから。

「一般的じゃないでしょうか」

ばーちゃんの店の看板はこれと一緒なんだけれど。

「何を扱っているかわかるならいいと思うが、これだとどうだろうな」

イルクさんも眉を寄せた。やっぱり帽子の看板じゃあ、帽子屋みたいかしらね？　わかりにくいかなあ。

「ギルドで看板は扱ってます？」

「少し時間はかかるけれど、用意出来るよ」

うーん。文字だけの看板を作ってもらおうかな。凝ったものでなければ、すぐ出来るだろうし。

「意匠を書きますから、お願いします」

帽子くださいなんて言われたら困るものね。ハッキリと職種がわかるようにしておこう。うん。

「お茶のおかわりはいかがですか？」

私はカップに残ったお茶を飲んでしまうと、イルクさんににっこり笑いかけた。

はじまりの町　６（後書き）

魔法使いと魔女については、もちろん私の捏造です。

小麦粉を練って油で揚げて、糖蜜をからめたお菓子って……かりんとうだね。

ファンタジーにかりんとうは…合わないなぁ。

ただいま開店準備中　1（前書き）

間違ってボツにした方を差し替えしていたので、再度差し替えしました。

現在、魔女のお店開店のため準備中。もう少しかかります。

私が店で扱うのは、自分で作った薬が主力商品だ。品質にはもちろん自信がある。そこらへんの薬師にだって負けないとさえ自負している。だてに小さい頃から薬草知識を叩き込まれてませんから。

それで家の片付けや開店準備の合間にちまちまと薬を作っていたのだが、それだけじゃ全然数が足りないため、既存の薬を仕入れて扱うことにした。

正直なところ自分の店に並べるなら自作の品を揃えたいところだが、悲しいかな自分で作れる数には限りがある。というか調剤だけならともかく、考えるまでもなく店番もしなきゃいけないんだから無理だ。

店番しながらの作業なんて器用な真似したくもないし、第一そんなの集中出来るわけがない。調剤はけっこう繊細な作業なんだから、邪魔はされたくなかった。

それでも店番を雇う余裕なんてないし、うちの父親のように手広く商売をやってるわけじゃないから、発注して作らせるほどの経済的な余裕もない。

そもそもそれは問題外だ。製造を請け負う業者に任せることで薬のレシピが同業者に流出なんて、よくあることだから。

駆け出しの小娘ごときが文句を言っても、黙殺されて泣き寝入り決定。目に見えている。やめ、やめ、やめ。
それくらいなら魔女の自尊心は傷ついても、出来合いの物と取り混ぜてお茶をにごした方がずっとマシだ。
私は自分が魔女だという利点があるから生産までやってしまうが、そもそも商売人が仕入れた物を売るのは当たり前のことだ。
うん。普通だ普通。気にしない、気にしない。そういうことで、開き直ってギルドに向かいました。

私がギルドに来たのは四度目だったが、今日はいつものおじさんの隣に初めて見る若い女の人が座っていた。
「はじめまして、エリアです。ちょっとお休みをいただいていたけど、いつもはウォルターさんとこちらで受付業務をしているわ」
ウォルターさん？　誰のことかと思ったら、隣にいるいつものおじさんの名前だった。四度目で初めて知りました。名乗られてませんよ。たしか。
エリアさんは人懐っこい笑顔がかわいらしい、綺麗な人だった。受付は店の顔だから、やはりこういう美人さんに座っていていただけると印象が違う。
「ふふっ。すぐにわかったわ。本当に綺麗な髪ね」

「いい目印でしょう」

彼女に言われて初めて、うっかり村にいたときと同じ感覚でショールを被るのを忘れて出て来てしまったことに気がついた。そういえば通行人に見られていた気がする。

考え事に気をとられて気がつかなかったって、おかしいだろう。私。外ではなるべく隠しているが、私の髪は実はすごく目立つ色なのだ。なんとびっくりピンクブロンドです。

この派手な、百メーター先からでも個人識別が可能と友人に言わしめた強烈なメタリックピンクは、身内以外では見たことがありません。

「かわいい色よねえ。私なんてつまらない栗色よ」

この髪は商人としては一発で覚えてもらえるから有利です。しかし、個人としては物凄く悪目立ちする。

どんなにシックな配色もぶち壊す、がっかりな色ですよ。どうにも落ち着かない色だと私はつくづく思うんだが、女の人にはかわいい色だとよく言われるのだ。

しかし本当にかわいいと思っているのかは、はなはだ怪しいものだ。実際に自分の頭がこんな色だったら、綺麗なピンクねーなんて笑っていられないと思うのだけれど。

エリアさんは自分の髪をつまらないと言うが、彼女はつやつやとし

た綺麗な栗毛だ。うらやましい。

失礼。栗毛じゃ馬みたいでした。綺麗な栗色の髪ですね。目とお揃いで。

ちなみに私の髪はピンクなのに目は黒で、幸いなことにお揃いじゃありません。ピンクの眼球なんて想像するとキモチ悪そうなんで、これはお揃いでなくて本当に良かった。

しかしそもそもピンクの目の人間なんて居ないだろう。髪の場合は後天的に変わる場合があるので、緑色や青色や想像するのも恐い紫色なんて人もいたりするらしいけれど、目の色に限っては遺伝が関係しているので、髪ほど極端な色の人はいないのが実情だ。しかし紫の髪って……ピンクと同じくらいありえない色だ。

何故そんな奇妙なことになるかというと、精霊に気に入られて守護を受けたり、契約したりすると、その精霊の色に染まる場合があるからなのだ。

そのため魔法を扱う人間で精霊の力を借りる《精霊使い》は、さっき言ったような変わった色の髪をしている者が多く、自分の魔力だけで魔法を使う《魔法使い》は生まれたときの色のままで変わらない。

まあ、精霊使いと言っても派手な色ばかりじゃないし、中には黒や茶色とかの落ち着いた色に変わった人だっている。土とか闇などの精霊が契約相手だと、地味……じゃない、落ち着いた色になるのだ。

自分としては闇の精霊がお勧めです。とは言え契約は精霊との相性というか気分次第なため、こちら側には選択する余地なんてないの

だけれど。

そして困ったことに精霊と結べる契約は一つきりと決まっていて、重ねることは出来ない。つまり一度ついた色を上書きすることは不可能なのだ。

さらに言うなら、契約で染まった髪は他の色を受け付けないので、たとえ髪粉で染めても色は流れてしまい、その色を変えることは出来ない。たとえどんな奇天烈な色になったとしても、そのまま我慢するしかないわけです。

わかっていたけれど試してみたら、やっぱり無駄だった。……祝福どころか呪いなんじゃないかと、しみじみ思ったものでした。

うちのばーちゃんなんて、未だに白髪知らずでピンク頭のままですよ。

結局髪を染めても、トラウマでしかないピンクブロンドと死ぬまで付き合うしかないという現実をあらためて突き付けられただけだった。

闇の精霊の加護持ちの人が心底羨ましいです。なんだって契約は重ねがけ出来ないんでしょうか。

ちなみに私の場合は自分から精霊と契約を結んだわけでなく、母方の血脈に組み込まれた魔女の盟約のためにピンクに染まっている。なんでよりによってピンクなのかと声を大にして叫びたくなったことは一度や二度どころではないけれど、それは置いておく。

その盟約は母系にのみ引き継がれるので、私が娘を産んだらその子

も当然ピンクブロンドになり、息子だった場合には血脈の加護から外れて、子供本来の色が現れるのだ。

実際に父親似の兄は、普通に黒髪と茶色い目をしている。母方の祖父も若いときは黒髪だったらしいので、盟約に染まっていなければ、私も元々の髪色は黒だったのだろう。

男に生まれたいと思ったことはないけれど、こればかりは兄が羨ましい。

話がズレました。

たとえば兄が将来結婚して娘が出来た場合。すでに兄は血脈の加護から外れているので、兄の子供はピンクブロンドにはならず、本来の色で生まれてくる。

黒は遺伝しやすい色らしいから、おそらく兄と同じく黒髪になるのだろう。黒髪はさほど珍しい色ではないけれど、そもそも珍しさなんて求めていませんから心底羨ましい。

まあ、どれだけ嘆いたって現実は変えられないので、もう諦めている。こんな奇天烈な色でも、ないよりはいいよ。ないよりは。うん。

嫌でも目立つこの髪に時々鏡の前でため息をつきつつ、いい看板だとも思っているし。事実店のいい宣伝になるのだから、利用しない手はない。

そう思わないとやってられないよ。

思わず感慨に浸ってしまって目の前のエリアさんを忘れてしまっていた。

そう。髪がピンクだろうが紫だろうが、気にしてもどうしようもないことは考えるだけムダだ。今考えるべきは店のこと、当座の未来だ。

「イルクさんはいらっしゃいますか？」

私は内心をおくびにも出さず、愛想笑いをした。

困った時はイルクさんを頼るように支部長さんに言われているので、遠慮なく呼ばせてもらうことにした。タダだしね。

町に到着そうそう掃除に追われる羽目になった私は、即日ギルドにねじ込んだ。ええ、さすがに耐えかねました。

それで向こうに頭を下げさせて溜飲は下がったが、自分一人では片付くはずもないので、人手を借りるつもりでいました。もちろんタダで。

「家の状態を正確に知るため、職員を見に行かせよう」

おや、見に来るだけ？私の話を聞いていたのに？

「ついでに手伝いの人を貸して下さい。調べてから人手を借りるなんて、時間の無駄ですから。今夜寝る場所もないんですよ」

誰のせいだという含みを持たせて、支部長さんににっこりと笑いかける。こういうところも似ているでしょう？ばーちゃんに。

「…いい奴がいる。力仕事は押し付けてやってくれ。ああ、お代はいただかないよ」

は？　そちらのミスなんだから、当たり前でしょう。請求されたって、絶対に払いませんよ。

「片付くまでお借りしても構わないんですよね」

代わりの宿を用意しろとまでは言わない。布団も届いたことだし、寝室は最優先で今から掃除します。でもそちらの不手際で色々と迷

惑を被っているだから、それくらい当たり前ですよね。

支部長さんは苦笑いしていた。本当にカテジナに似ているなとつぶやかれてしまった。ええ、そうでしょうとも。顔も似ているけど、がっちりした性格がとくに祖母似だとよく言われます。

…でもしみじみ言われると複雑な気持ちです。

図々しいですか？　年長者にこんな無礼な態度をとったりして。私が男だったら生意気だって横っ面を張られているでしょうか？

でもこっちは未成年とはいえ商売人。ちゃんと納税の義務も果たしている。子供扱いされて、見くびられるのは我慢出来ない。ちゃんとギルド員登録して、組合費も納めてるのだから。

まだ成人前だけど、仮にも商業許可証明を発行した相手を子供扱いはないだろう。最低でも二年間という商業実績を証明した書類を添付した帳簿を確認したうえで、ギルドは商業許可証明を発行したはずだろうしね。

きちんと納税証明書だって付けて提出したし、未成年ということで保証人もいる。父親ですが。

父の名前を知らないとは、まさか言わないだろう。商人としては割と知られているのだから。

さぞかし可愛げのない小娘だと向こうは思っているだろうが、こっちはこれから一人でやって行かないとならないんだ。財布も気持ちも引き締めてかからないと死活問題だ。ナメられてたまるか！

保障だってきっちりとしてもらうんだからね。

という敵意丸出しの私をなだめるために紹介してもらったのが、イルクさんだった。

補償手続きの申請書類作成のための調査のかたわら、遠慮なく掃除を手伝ってもらい、出来上がってきた看板を取り付けてもらい、今は買い物に付き合ってもらっている。

さすがに図々しいという自覚は重々あります。はい。

傍らの大きな体を見上げると、図太い私でも申し訳ない気持ちになる。

今日は休日だというイルクさん。休日手当て……出ないでしょうね。

「買い物ついでに町を案内しよう。着いたばかりで、何もわからないだろう」

「どうもありがとう。助かります」

重ね重ねありがとうございます。本当に助かります。行きたい場所や、避けた方がいい危険な場所などは、大まかにでも知りたかったのだ。いくらこんな髪の色をしてても、揉め事に巻き込まれないとは限らないから。

現に私の髪を見て不思議そうに振り返る人や、じっと見ている人が

いる。さすがに視線が痛い。

「ねえ、あれって…」

「え？まさか」

はい正解。そのまさかです。ピンクブロンドなんて見たら気になるのは分かるけど、指は指さないで欲しい。失礼でしょう、あなた。なんなら水晶使ってみますか？ちゃんと本物ですよ。

地元だったら近隣の人は見慣れてるから気にしないんだけど、初めて私の頭を見る普通の人の反応はこういうものだ。

またショールを忘れて出て来てしまった私。うっかりにも程があるが、今さら取りに戻れない。

この町に着くまでに出会った人たちもそうだった。お年寄りに拝まれたときは、どうにも居たたまれなかった。拝むなら神殿に行ったほうがいいと思います。

だんだん思考が陰々としてきて、それがに顔つきに出ていたのか、イルクさんが心配そうに声をかけてきた。

「サララ。どこか店に入ろうか」

気配りの出来る男性は貴重だが、そのせいで支部長さんに役目を押し付けられたのかと思うと、善し悪しだと思う。

「じゃあ、そこの小間物屋さんに行きたいです」

うっかりいつもの調子で髪をひとつにまとめて編んだだけだから、人目につくのは当たり前だ。あそこでショールでも買って頭から被ることにした。

イルクさんは頷いて、私の肩に手を添えて誘導してくれた。ご親切にありがとうございます。

内気な人だと思っていたのだけど、さりげなくエスコートしてくれるあたり、違うのかしらね？

いや、このくらいの年齢の男の人からみたら、私なんて童女か。背も低いし。

そんなどうでもいいことを考えながら、二人で手近な小間物屋の店先をくぐった。

ただいま開店準備中　3（前書き）

１１月１日。精霊の存在、精霊使いと精霊の愛し子について言葉足らずだったのを加筆しました。

ふと目について何も考えず入った店だったが、すぐに後悔した。そこは小娘が気軽に来れる店ではなかった。

大抵の店は昼間でも奥の方が薄暗くなりがちなのに、この店はずいぶん明るかった。灯火ではなく、照明灯が設置してあるのだ。

魔法具である照明灯は、決して安いものではない。佇まいが地味だったため気がつかなかったが、ここはそれなりの店だった。

いやだいぶ《いい店》の間違いだ。店内には高価な輸入物の化粧品や、趣味のいい装身具類が並べられている。

これでも多少の目利きには自信があるから判る。ここには安物は置いていない。ふと目についた細工物の櫛でも、私くらいの娘がおこづかいで買うには厳しい値がついているのだと思う。

正直なところ店を変えたかったが、このピンク頭をさらしたまま外に出たら再び注目の的になる。自業自得だけど、それは嫌だった。仕方ないので、そのまま店内を物色することにした。

早々に目的のショールだけ買って出るつもりだったのに、つい目的以外のものに目がいってしまうのは女の業でしょうか。

透かし彫りの白木の髪飾りなど、可愛いくて思わず手に取ってしまった。マズい、ちょっと欲しいかも。

しかしそこは我慢する。小さな子供じゃあるまいし、欲しいものと

必要なものの判断くらい出来ますよ。

残念だけど、手に取ってしまった髪飾りを元の場所に置き、じっくり見て回りたくなるのを堪える。今日は連れがいるから、今度来たらゆっくり見よう。多分、もう来ないけれど。

その連れのイルクさんは店にすぐ入ったあたりで、居心地悪そうにしている。

男の人には関係のない店だから、やはり居心地が悪そうだ。すみません、さっさと済ませちゃいます。

でもイルクさん大きいから、他のお客さんの邪魔になりますよ。今のところ私たちしかいませんけど、もう少し横にずれた方がいいです。

そして目的のショールだが、値段を気にしなければ選び放題なくらいに種類は多かった。

しかしそんなわけにはいかないので、こちらの予算に合わせたものだけを見せてくれるよう店員さんに頼んだ。

年配の上品な美人店員さんが、チラチラと私の頭を気にしながら何点かを目の前に並べてくれる。

うん。やっぱり気になりますか、この髪。

でも私は店員さんの視線に気づかない振りをしてショールに目を落とす。すみません。人を待たせているので無視させていただきます。

「うーん」

並べられた中から好みのものを二枚選び出して、しばし迷う。どうせ買うなら、好みに合った似合う物がいい。

どちらも薄手の軽い毛織りのものだが、新緑の色の方は好きな色だし房飾りがついていて可愛い。

葡萄色の方は私のピンクブロンドには似合わない気がするが、紫の微妙なグラデーションが綺麗でかなり気に入ってしまった。

かなり迷ったが、すっぽり頭を隠してしまえば髪色は関係ないので、葡萄色の方に決めた。ついでに髪をまとめるためのピンも選んだ。

「会計をお願いします」

私はギルドカードを取り出した。普通の店には置いていないが、高額商品を扱うような店には、大抵会計のための水晶板が置いてあるのだ。

どういう仕組みかは知らないが、水晶板が銀行口座と直結していて、現金が手元になくとも客が自分の銀行カードかギルドカードをかざせば手軽に支払いが出来るという物だ。

客は余計な金を持ち歩かずに済むし、店も大金を置かずに済むため防犯面でも安心。非常に有効なアイテムだ。

ジャラジャラと硬貨を数えなくていいのは楽だし、今ショールを買うと手持ちのお金のおおかたが消えてしまうので、この店にあって助かった。わざわざギルドまでお金を引き出しに行くのは面倒だ。

ちなみに水晶板は情報伝達のための道具だから、その中にお金が入っているわけではない。もし水晶板が盗難に遭っても、お金はなくならない。水晶板自体がギルドからの貸し出し品で、賃貸料は保険も込みだから、店も責任をとらなくていい。

うちに来るお客さんはダンジョン目当ての人が多いだろうから、大抵はギルドカードを持っているはずだろうし。多分無駄にはならない。

会計は手早く済むし、釣り銭はいらないし、収支の計算も楽になるし、本当にいいことづくめの素敵アイテムなんだけど、なにせ賃貸料が高い。たしか一月で銀貨10枚、10ランの筈だ。

いきなり導入するのは、やっぱり無理だな。しばらくソロバンで頑張って、採算が合うようなら考えるとしよう。

私がギルドカードをその水晶板にかざして支払いを済ませると、さっきの店員さんが待ち兼ねたように話し掛けてきた。

「失礼ですがお嬢さん。その髪は本物ですか？」

「はい」

自分で言うのもアレですが。ピンクですよ？ピンク！わざわざこんな奇天烈な色に染める人がいるなら、是非とも会ってみたいものですよ。

「とても珍しい色ですね。あの、それでお嬢さんはどちらですか？」

「私の髪の色は、守護を受けてるせいですよ。でも精霊なんて見たことありませんけど」

髪色が自然ではありえない色の場合、二通り考えられる。精霊と契約した精霊使いか、精霊に愛され守護を受けて精霊の色に染まった精霊の愛し子かだ。

「精霊が見えないのに、色付きの愛し子様なんているんですか？聞いたこともないですよ。」

色なしの愛し子もいる…というか、色持ちの方が圧倒的に少数なのだ。知らず知らずのうちに精霊に守られていて、鑑定してもらってびっくりってことが多いらしい。

色付きになるには、精霊が見えて意思を通じ合わせることが条件だからなのだが。まあ中には例外もあるんだけど。

「全然わかりません」

それは本当だ。今まで精霊の気配なんて微塵も感じたことはない。

「それは不思議ですね」

彼女はしきりに首を傾げ、手元の会計に使う水晶板を気にしている。会計用のその水晶板だが、実は本来の用途とは違う使い方も出来るのだ。

「いいですよ。見て確かめても」

目の前の人がむずむずとしているので私は水を向けてやった。

「すみません。じゃあ、失礼します」

店員のプライドより好奇心が勝った彼女は、私の言葉に遠慮なく水晶板に手を掛け、自分の顔まで上げようとして失敗した。水晶板が重すぎて上がらなかったのだ。

なるほど。水晶板はまな板ほどの大きさがあり、厚みもあるため、ずいぶん重いようだ。盗難防止の意味もあるのかもしれないが、下手に持とうとすると手首を痛めそうだ。

彼女は持ち上げるのを諦め、カウンターに水晶板を立ててそれ越しに私を覗いた。精霊と契約、もしくは守護を受けている者を見分けるには、対象を水晶越しに見ればいいのだ。

精霊眼を持たない人の目には水晶越しでも精霊の姿は映らないが、精霊が愛し子に授けた祝福の光を見ることが出来る。

「見えますか」

後ろでイルクさんが何か言いたそうにしていたが、気にしない。実際に見てしまえば納得するだろうし、いちいち怒ることでもない。

「ああ…」

彼女が思わずこぼした声に苦笑した。水晶板越しに見えるものを私も見て知っている。

精霊に愛されその祝福を受けた者は、祝福の光としか言いようのない淡い光を全身にまとわり付かせているのだ。

「本当に見えるわ。綺麗ですねぇ」

呆然とつぶやくその人に私は声をかけた。

「ここで身仕度させてもらえますか？　このままじゃ目立つので」

「ああ、かまいませんよ。いえ、お嬢さま。失礼いたしました」

店員さんは好奇心が満足したら恥ずかしくなったのか、謝ってきた。《お嬢さん》から《お嬢さま》に呼び方が変わっていることには気付かない振りをしたが、もともと丁寧だった彼女の態度がさらに改まってしまったことで、自分が対応を誤ったことに気付いてこっそり舌打ちした。

私の気分を悪くさせなかったかと気にして、かわいい匂い袋までオマケさせてしまったのは、逆に申し訳なかった。

精霊信仰のこの国で、精霊を無視する者はいない。気まぐれな精霊たちは人々に恵みをもたらしたと思えば、時にそれを踏みにじる。

誰もが精霊に愛されることを望みこそすれ、嫌われ呪われることを望む者などいるはずもない。

精霊使いと愛し子は精霊の好意が見える形になったものだから、無下に扱うことは出来ないのだ。たとえ内心で腹立たしく思っていても、それを表に出して傷付けることは禁忌とされているのだから。

実際の事例としていくつか思いつくが、精霊に呪われた者の末路は悲惨極まりないと聞く。私は特別扱いされたいわけではないので、

ちょっと反省した。

「あの精霊使い様も、あんな風に光って見えるのかしらねぇ」

私がため息を吐きつつ髪をまとめていると、店員さんがつぶやいた。

おさげにして垂らした髪をその場で素早くまとめ、あとはショールを被るだけにして、私は店員さんに尋ねた。

「精霊使いを見たことあるんですか？」

精霊使いは資質を持つ者が稀なため、魔法使いよりも圧倒的に数が少ない。普通に生活をしていたら、まず出会うことはないはずだった。

珍獣なみに希少な精霊使いは引く手数多だ。準貴族扱いの彼らの多くは、神殿や国のお抱えになっている場合が多い。そこいらをフラフラと歩いているわけがないのだ。

今さらダンジョンに潜って肉体労働をする、物好きな精霊使いがいるとも思えないし、彼女はどこで見たのだろうか。

その私の問いに答えてくれたのは、いつの間にか側に立っていたイルクさんだった。ちょっとびっくりしましたよ。

大きい体の人はのっそりと動くイメージがあるが、イルクさんは意外と敏捷らしい。静かに動く人だな。今足音しましたか？

「そういえば二、三年前に王室お抱えの精霊使いが来たことがあったな」

「ええ、ダンジョンの視察に来られたんですよね」

なるほど。ダンジョンは国家間で、それを巡って戦争が起こってしまうほど貴重な資源だ。騎士団が常駐しているくらいだし、お抱え精霊使い様がダンジョンの結界がきちんと機能しているかを見に来たとしてもおかしくはないか。

この町は作りが変わっていて、普通ならば町外れや町の外にあるダンジョンが町の中心にある。

というか当時の王様が、ダンジョンを中心に町を作っちゃったのだ。一際高くそびえる魔封じの塔がダンジョンへの入り口です。

塔自体が目立つ場所にあるから、出入りする人間も当然のこと人目につく。よそのダンジョンみたいに、こっそり入るのは無理なのだ。

その精霊使い様とやらも、きっとすごく目立ったことだろう。店員さんやイルクさんが知ってるのも、そういうわけだ。

「まだ若いかたで、綺麗な青い髪をしていましたよ」

青かあ。単純に色で考えたら、水の精霊使いかな？

ちなみに私は、御先祖さまが盟約を交わしたという自分の守護精霊を知らない。かなり昔のことなので、いまとなっては精霊の真名も失われてしまい、誰にも呼び出せないのだ。

そもそも見えないことには、目の前にその精霊がいたとしてもコミュニケーションを取りようがないんですがね。

しかし今さらだけど、守護色がピンクってどんな精霊なんだろうか。護られているのに、どんな効果があるのか未だにさっぱりわかりま

せん。

髪色が人より派手で目立つこと以外に、とくに運がいいとかの自覚もないし、守護の内容がさっぱり想像つかないんですよ。

効果が単に《目立つ》とかだったらいやだな。

精霊の愛し子とは言われているものの、守護の効果がわからないって……我ながら微妙すぎるわ。せめて違う色だったらよかったのにな。

土の精霊や闇の精霊みたいに、落ち着いた色がよかったな。髪色としては一般的だから、一見して精霊の愛し子とは気づかれないし。

火の精霊でもいいかもしれない。イルクさんみたいに綺麗な赤毛に変わるのも悪くないわ。

ちらっとイルクさんの頭を見上げる。派手は派手なんだけど、ガーネットみたいで綺麗だ。まあ、ピンクよりはなんだってマシよね。

ただいま開店準備中　5

ショールをすっぽり頭から被って髪を隠してしまってから、私は大きな姿見の前で姿を確認した。葡萄色のショールに包まれた、日焼けしない生白い顔が映っている。

私はあまり自分の顔が好きではない。

色は白いけど、目は大きいけど、可愛いと言えないこともないけど、どこか全体的にアンバランスに思えて、首を傾げてしまうのだ。

そこは見ないようにして立ち位置を調整し、全身が映るようにする。そうして茶色いスカートの裾のシワを直してから、全身を見直して……またもや首を傾げてしまった。

うーん。まだ成人前ということもあって、ふくらはぎの半ばまでしかない短いスカートを履いているのだが、ちょっとバランスが悪いように思う。

別に成人前の娘が長いスカートを穿いちゃいけないわけでもないし、客に舐められないためにも、身なりは整えておいた方がいいかもしれない。

布地を買って自分で縫ってもいいが、今は時間が惜しい。ショールがいい値段だったからあまり散財したくないけど、長いスカート一枚くらいなら大丈夫だろう。

それとも古着屋で探した方が安上がりでいいか。これだけ大きな町なら種類も多そうだし。多少の寸法の差くらいなら、自分で手直し

すればいい。
そうして頭の中で算段しているとイルクさんに声をかけられた。
「もう出られるか？」
すみません、忘れていました。いい加減出たいですよね。あとから来た若い女性客もこちらを見ているし、イルクさん、さぞかしいたたまれないのだろう。
「ごめんなさい。お待たせしました」
まだ案内してもらっている途中なのに、余計な時間をとっちゃいましたね。せっかくのお休みだというのに、返す返すも申し訳ありません。
店を出ると正面の建物越しに魔封じの塔が見えた。本当に変わった作りだ。この町を作ったという王様は、よほどケチ……いやいや、心配性だったらしい。
塔自体がダンジョンの封印なのに、町自体を結界にしちゃって害意を持つ者を排除しようとしたんだから。だけどそこまでしなくとも作った時点で、出入りが制限されてるってば。
こんな人目につく場所で、ギルドや騎士団が目を光らせている場所で馬鹿をやる人間なんていないと思ったら、たまにいるらしい。

「それが、たまにトラップにひっかかる《迷子》がいるんだよ。毎年何人かは出るかな」
イルクさんが苦笑しながら教えてくれた。普通にダンジョンを利用しに入るぶんは問題ないのに、害意を持つ者が入ると塔内のなんでもないところで迷って出られなくなるトラップが、内部に仕掛けてあるそうなのだ。
塔内にはギルドの買い取り施設があるから、窃盗目的で入り込むお馬鹿さんが時折いるそうだ。
「いったん迷子になると、本人にはどうしようもないんだ。正気を失って泣き叫んで手がつけられないこともあるらしいよ」
「それは……恥ずかしいですね」
普通なら迷うはずもない建物の中で迷子になって、パニックに陥る大の大人。恥ずかしいなあ。
「でもそうなったらどうするんですか？」
暴れられたら危なくて仕方ないんじゃないかと思うのだけど。
「大丈夫だよ。そのために騎士団が詰めているんだし」
なるほど、塔の中に騎士様の詰め所があるのか。そんな場所に盗みに入るって、ますますなにを考えているのか分からない。本当にお馬鹿さんだな。

パニックになってしまった迷子さんは、騎士様が速やかに保護してくれるらしい。そしてそのあとには騎士様による訊問が待っていて、牢屋行きと。

「でもトラップにかかっているなら、出られないんじゃ？」

「意識が無くなれば、出られるらしいよ」

うわあ。有無を言わさず、力ずくで騎士様に気絶させられて撤収となるわけですか。それはまた、自業自得だけど酷いな。

町の入口に立っていた立派な体格の騎士様を思い出して、背筋が寒くなった。すごく痛そうだ。殴られたら、ただじゃ済まない気がします。骨の一、二本くらいは折れちゃうんじゃないの？　ひょっとしなくても。

やっぱり悪いことをするとろくなことないってことなんだ。人間地道に生きるのが一番なんだってば。

なのに悪いことをする人間が絶えないのは、ダンジョンにしか棲息しないお宝……魔物たちの存在が原因だったりする。

ダンジョンは人間たちが欲して止まない宝の山だ。そこにしか棲息しない魔物の体の一部が貴重な魔法触媒、魔法具や魔道具などの材料となるのだ。そのためダンジョンへ潜る人間は後を絶たないのだ。

需要があれば供給は成り立つもので、たとえ危険とわかっていてもダンジョンは貴重な資源庫なのだ。宝の山をみすみす見逃すはずもなく、昔から腕に自信がある者は命がけで挑んできた。

もちろん国や神殿だって、指をくわえて見ていたりはしない。あれこれと理屈をつけては接収だのなんだのを繰り返して、管理出来るダンジョンは強引にでも管理下に置いてきた。

まあ、管理してある方が探索側も安全だと聞くし、ダンジョン資源の供給や価格も安定するから問題はないと思う。戦争はごめんだけれど。

だからこの町のダンジョンが発見されたときも、かつてないほどの規模のダンジョンの発見だと大騒ぎになったらしい。

幸いにしてこの地が王家の所領で遊んでる土地だったため、いざこざは起きなかったらしいが、別の問題が起きたというのは有名な話だったりする。

普通に塔の結界でダンジョンを作っただけでは安心出来なかった当時の王様が、さらに町自体を何者にも干渉させない結界として設計させたのだ。それは莫大な費用をかけて。

この町の守備力は王都並を誇ると聞いたが、町そのものをダンジョンを守る巨大な結界にしちゃった王様はなにを考えていたんだろうか。

いくらダンジョンがお金を生み出す宝の山でも、町の建設で国庫を傾けたら本末転倒だ。とっとと譲位させられてしまったのも納得できる。

別に町ひとつ建設したくらいで国が傾いたわけじゃなく、他にもいろいろとやってくれた結果のことらしいが、各ギルドの発展や精霊使いの保護、またダンジョン学を確立させた功績などよりも、国庫

を空にして国を傾けた愚王としての方が有名なのは仕方ないと思う。
知人によると王家としても恥と思っているらしく、この王様のことは歴史書にもほとんど記述がないらしい。功績は立派でも、上に立つ者としては残念な人だったんだな。
この王様のおかげで国民の生活レベルが飛躍的に上がったので、私は好きなんですけどね。
まあ、作っちゃったものは元を取らないと帳尻が合わないということで、この町は徹底的に管理されることになったんだけど。
しかしその管理が問題だ。この町では、結界に影響が出るといけないために許可なく勝手に道を作ったり、大きな建物を立てたりは出来ないのだ。
万にひとつも破ってしまうと第一級の厳しい罰則にあたるとか。国益を損ねかねないので当たり前とは思うけど、第一級刑罰って死刑ですよ。叛逆罪と同等ってことになりますね。
死刑のうえに、さらには家財没収。おまけに連座で三親等まで投獄になるというのだ。
配偶者は当たり前のこと、ひいジジババから自分の曾孫。伯父伯母から甥姪までが適用って、普通に一族郎党道連れって言わないかしらね。恐ろしい。
とにかくそういうことなので、要望のある者はいちいち御上にお伺いを立てなくてはならないのだ。たとえ何年待たされようとも許可が下りるのをひたすら待たなくてはならない。

商売に必要な倉庫を建てる許可を願い出た商人が、申請が下りたときには没落していた。なんて笑い話があるくらい時間がかかるらしいです。

規模は同じのままで改築修繕するほうが簡単に許可が下りるため、この町には古い建物が目立つ。この町で新しいものなんて、数年前に新しく出来たという市場くらいだろう。

移転先を国が決めて着工するまでに十年以上かかったらしいですよ。ありえない。

区画整理に反対する住人の抵抗やら立ち退きの攻防やらでいざこざが多発して、すごく大変だったらしい。この前買い物に行ったら、露店のおばちゃんが教えてくれました。

「あ」

食料品店を出たところで、時を知らせる時鐘が鳴り響いた。時鐘は一日三回、朝の7時と正午と夕方の5時に鳴らされるので、今は正午ということになる。

「もう昼か」

「色々と回りましたからね」

「ずいぶん買い込んだが、まだ欲しいものはあるか？」

「いえ、十分買わせていただきました」

荷物持ちがいるのをいいことに、つい遠慮なく買い込んでしまった。調合用品に小物に食品、どれも生活するのに欠かせないものばかりだ。これで必要なものは揃ったはずだ。

「今すぐ欲しいものは買えたので、あとはまた買いに来ます」

買い物がてらイルクさんに案内してもらったので、町のだいたいの配置はわかった。

「そろそろ帰るか」

「はい。お昼まで付き合わせちゃってごめんなさい。ちょっと買い

過ぎたかしら」

大物は配送を頼んだので、持てるものは二人で手分けしたが、二人共これ以上持てないほどの量の荷物を抱えている。

家が遠かったら馬車を捕まえたいところだけれど、幸い我が家は歩いてもたかがしれている距離なので歩いて帰ることにした。まあ、遠かったとしても手持ちのお金が足りないので、結局歩きになるのだけど。

とにかく二人して黙々と歩く。イルクさんは無口なので仕方ないが、私は抱えた荷物の重みで腕が痛くて、話す余裕がないだけだ。やっぱり自分には腕力がないのだと、身に染みて感じた。

家までの道のりがやたらに遠く感じられて、自分の非力さが情けなくなってくる。

「重いか？　もう少し持とうか」

「十分持ってもらってますよ」

いけないいけないけない。どうも顔に出ていたらしい。イルクさんに荷物のほとんど持ってもらっているのに、これ以上増やすわけにはいかない。

「もうすぐ着くし、平気です」

本当は平気じゃないが、我慢出来ないほどじゃない。そもそも全部、私の荷物だ。

これが兄や友人なら遠慮などしないが、イルクさんはギルドの不始末の尻拭いに駆り出された不運な職員にすぎない。せっかくの休日を小娘のお守りで荷物持ち…私なら休日手当てを要求するところだ。
しかし本当に自分には体力がないのだと実感した。薬の調合はそもそもが結構力を使うものなのに、これは問題じゃなかろうか。
本気で体力作りを考えた方がいいかもしれない。でもあんまり筋肉質になるのも嫌だ。
私は荷物の重みをこらえるために、普段は考えもしない馬鹿なことを考えながら、イルクさんの後について必死で家への道のりを辿った。

やっとのことで家に帰り着き、買った荷物をテーブルに置いて、痛む腕を曲げたり伸ばしているとイルクさんが帰ろうとしているのが見えた。
「あ、待ってください。お昼ご飯を用意しますから」
さんざん振り回した人を空腹で帰すなんてとんでもない。ごちそうしますよ、大したもてなしは出来ないけど。
「いや、今から仕度するのは時間がかかるだろう。……広場でなにか買っておけばよかったな」
いったん断りかけたイルクさんだったが思い直したのか、脱いで腕

にかけていた上着を纏って振り返った。

「そうだな。何処かに食べに行こうか。少し遠いが、いい店を知っているから」

誘う以上はイルクさんのおごりですね？　せっかくの休日を無料で子守りをして、荷物持ちまでしたうえに御馳走までしてくれるなんて、ずいぶんと気のいい人だなあ。

でも食べに行くのは却下です。飲食店街は一区画向こうですよ。正直なところ、もう歩きたくないです。

それに《いい店》なら、今は昼過ぎで書き入れ時のはずでしょう。わざわざ遠出して、すきっ腹を抱えて待たされるなんて嫌ですから。

それ以上に屋台物も勘弁して欲しい。イルクさんがいう広場というは、ダンジョン前の探索者広場のことだ。そう広くないのだが、いつも探索者向けに軽く食べられる軽食の屋台や安価なアイテムの露店が並んでいる。

ここから近いので、引っ越ししたてのうちは二度ほど屋台のお世話になったが、味もそこそこだった。しかし、もうお世話になりたくありません。私にはヘビー過ぎるのだ。

体力勝負の探索者向けの屋台料理だからか、軽食といいながらもいかにもスタミナのつきそうな物ばかりで、とにかく胃に重たい。

揚げた小麦生地に揚げた鶏肉とチーズを挟んだものとか、鶏肉の串揚げとか、こってりスープの麺に山盛りの鶏肉を山盛りにしたものとか……見るからに、胃にズシリと来るものばかり。

何と言うか油と肉を使いすぎなのだ。スープが肉の脂と炒めるのに使った油でギトギトだったのには、正直なところ閉口した。

味は美味しかったけど、油が舌にベタベタとくどいったらありゃしない。残すのも失礼かと頑張って食べた後は、しばらくは胃もたれして辛かった。

探索者って胃の頑健さも求められるんだろうか。

野菜はないのか。野菜は！　思い出しただけで胸やけしてきた。もう、お腹いっぱい、ごちそうさまでした。

しかもびっくり値段の方も割高なのだ。値段まで探索者向けか。

商工ギルドからも近いから、イルクさんも利用するのだろうか。家からお弁当を持参か、隣の飲食店街まで足を運ぶのをお勧めしますよ。

というわけで

「昨夜の残りだけど、スープを温めますよ。パンも買って来てるし、すぐ出来ます」

あんまり借りを作るのは嫌だし、それ以上にまた歩いて行くのが面倒臭いので作りますよ。こっちの方が本音だが、もちろん内緒。

「はい。井戸で手を洗って来てください」

イルクさんに洗い立ての清潔な手拭いを差し出して、私は有無を言わさず送り出した。

厄介事の予感（前書き）

イルク視点です。

厄介事の予感

井戸端で、ついため息をつく。

（まいったな）

未成年とはいえ、年頃の女性の家にあまり長居するのは気まずくて外に誘ったのに、結局サララに押し切られて昼食を食べていくことになってしまったのだから。

休みの日なのに、つき合わせて申し訳ないという顔を彼女が頻りにしていたから、こちらも断るに断れなかったのだ。

可憐な見た目にそぐわず、サララは抜け目のない性格をしているようだ。あの有無を言わさない笑顔の行く末が恐ろしい。

（かわいいのに、怖いぞ）

かわいい…そう。サララは可愛らしい少女だった。多少の性格のアラくらい帳消しになるくらいには愛らしい容姿をしていると思う。

少し下がり気味の濡れたような大きな黒い眼に見つめられると、実のところ胸がざわつく。

（妙な色気があるんだな）

未成年相手に色気を出すのは本意ではないし、そんな嗜好の輩は去勢してしまえばいいと常々思っている自分としては、まさか自身にそんな嗜好があったとは思いたくないし、認めたくもない。

（気の迷いだ。一回りも歳が違うんだ。正気に返れ）

そう自分を説得して冷たい井戸水で手と顔とついでに頭を洗い、サラに渡された手ぬぐいで顔を拭いていると彼女が呼びに来た。

（前にもあったな。これ）

覚悟を決め、前と同じように彼女に視線をやり……同じように衝撃を受けた。

「もうすぐスープが温まりますよ」

ショールを外し、陽の光にきらきらと煌めく美しい光沢のピンクブロンド。

その不思議な色の髪に縁取られた乳白色の卵形の輪郭に濡れた優しい黒い目と小さな鼻、桃色の愛らしい唇が配置よく置かれている。

小柄なところも保護欲をそそり、不本意にも実に将来有望だと思ってしまい、思わず顔をしかめた。

（……こんなものを野放しにするな！　自分が親なら、絶対外になんて出さないぞ）

ただでさえ若い娘なんて虫がつくものだ。独り立ちして一人で立てるようになる前に、あっという間に虫喰いだらけにされるに決まっている。

簡単に自分を家に招き入れたのは、仕事の付き合いの範疇（はんちゅう）だからと

安心しての振る舞いだろうが、あまりに警戒心が足りない。

（身内でもない男を飯になぞ誘うな。勘違いするぞ）

支部長の知人の孫で有力者の娘で、選りに選って精霊の愛し子。迂闊に血迷おうものなら、どう考えても厭な予感しかしない。

しかし軌道に乗るまでそれとなくサポートするよう支部長に言われているので、距離を置くのも難しい。面倒なことだ。

支部長に釘を刺されるまでもないが、誓って自分に少女嗜好はない。手を出す気なぞ、さらさらない。が、未成年の幼い娘と知っていても、食指を伸ばそうとする馬鹿者はどこにでもいるだろう。

彼女のその髪が、果たしてどれだけ守りになるだろうか。果てしなく面倒事の予感しかしないのは、気のせいではないだろう。

とにかく自分は深入りしないよう気を引き締めつつ、注意を払わなくてはならない。

（厄年はまだ先のはずなんだがな…）

テーブルに置かれたスープのいい匂いに胃壁を刺激されながらも、面倒事の予感に胃が痛くなりそうで、知らず知らず手で押さえていた。

厄介事の予感（後書き）

本人が思っているほど、周囲は子供と思っていない様子。

シャルペロと私

《サラちゃー。今日は買い物だったんでしょ》

「そうよ。いろいろ回って来たわ。シャルペロも来ればよかったのに」

夕食の支度をしていると、いつの間にどこからか現れたシャルペロが話し掛けてきた。散歩にでも出ていたか、屋根の上で日向ぼっこでもしていたのだろう。

《やだよ。人混みキライだもん。ボクは適当に歩き回ってるからいいよ》

正確には《人が嫌い》だ。緑の精霊が本性であるシャルペロは、基本的に私以外の人間と関わりたがらない。今日のように私が家族以外の人間と一緒にいると、いつの間にか姿を隠してしまう。

今日もイルクさんが荷物を抱えて入って来たのを見たとたんに、ふいっとどこかに消えてしまった。

そんなところも本物の猫のようで面白いが、精霊の中でも闇と緑の精霊は臆病で気難しいと聞くので、シャルペロに限った話ではないのだろう。事実彼らは契約を結ぶことが滅多にないらしい。

本来なら使い魔は契約主から勝手に離れたりしないらしいが、私とシャルペロの場合はちょっと特殊だ。血の盟約ですでに別の精霊と契約を結んでいる私は、本来なら使い魔との契約が出来ないはずなのだから。

「まあ、好きにしなさい」

それに精霊は元来が気儘なもの。たとえ契約者であろうとも縛ることは出来ない。契約者はお願いして力を貸してもらっているだけなのだ。

たとえ契約したとしても、あくまでも精霊が上位なのだが、そこらを勘違いして契約すれば精霊を自由に使役出来ると思っている者がいる。しかし精霊が言うことを聞かないことに腹をたて、無理に従えさせたり迂闊に危害を加えようものなら、手酷いしっぺ返しを受けるだけだ。

もし精霊に害を加えることが出来るなら、それは同じく精霊の上位の存在だけ。そうは言っても、精霊が同族で争うような人間と同じ愚挙に出ることはありえないが。

彼ら精霊こそが、万物を司る摂理そのもの。たとえ時に無慈悲に思える精霊の行いにも、必ず法則があるという。広く見れば世界の秩序を保つため、必要なのだと言われている。実際シャルペロも、なにを考えているのかわからないことも多い。そんなものを従えようなんて、まともな頭があれば考えることはない筈だから、しっぺ返しを食らった人に同情なんてしない。

《ねえ。また昨日のスープの残り？　あの赤い奴に全部食べさせたらよかったのに》

「赤い奴じゃなくて、イルクさん。それに贅沢は敵」

シャルペロを見ていると、とてもそんな高尚な存在とは思えないん

だけどね。まあ、私欲のために戦争を始める人間などよりは、遥かに上等だとは思う。

《せめて味付け変えてね》

「無理に食べなくていいわよ」

レンズ豆を火にかけたスープの鍋にほうり込みながら言ってやった。レンズ豆はほかの豆より早く煮えるので楽でいい。

好みとしては歯ごたえのあるひよこ豆の方が好きだけど、あれは一晩水にふやかさないと駄目だからあきらめる。

《あ、レンズ豆ー。それ好き》

塩を一つまみと乾燥トウガラシを挽いて粉末にしたものを加え、味付けを変えるのを見てシャルペロが目を輝かせた。

元々精霊なのだから、シャルペロは食事を取る必要はない。精霊はつねに大気に満ちているマナを呼吸しているので、食事をする必要はないと教えてくれたのは、シャルペロ自身だ。

しかし食事という行為を楽しむことを覚えた彼は、色々と食べたがる。ネズミの干物に興味を持たなかったのは、幸いだったなぁ。

《ねえ、パンある？》

「買ってきたわよ」

私は平たい麦パンのかたまりを見せた。最近は小麦の柔らかいパン

を見かけるようになってきたが、値段が高いこともあって人気はないようだ。

私も実家の食卓で食べる機会があったが、どうにもフニャフニャと柔らかすぎて頼りなく、味も麦パンよりぼんやりしていて、好きになれなかった。

やはりしっかり噛み締められてお腹にたまる麦パンの方が、食べ慣れていて好きだ。家族もそう感じたらしく、それ以来食べる機会はない。

年をとって歯が弱くなったら、食べやすい小麦のパンを好むかもしれないが……いや、麦パンをスープに浸して食べれば済むことか。下品だけど。

小麦はお菓子や麺の材料でパンはやっぱり麦がいい。という思い込みが私だけでなく、皆にあるのだろう。元々この国は麦の文化だから、あとから入って来た小麦は根付かないようだ。

外国とかだと庶民の飲み物のエールも、この国では王様をはじめ貴族さまは大好きで、こぞって領民に作らせてるくらいだし。

水分と栄養を一緒に取れるエールは、生水よりも安心安全な国民的飲み物なのだ。お昼ご飯代わりに携帯している人もいるほどだ。

あ、小麦で作ったエールは飲みやすくて美味しいって女の人に人気だと聞くけど、飲んだことはありません。未成年なので。

落とし卵とレンズ豆のスープに切り分けた麦パンの夕食を食べたあと、シャルペロが満足そうに舌舐めずりをして言った。

《今日散歩したとこに、いっぱい使える草が生えてたよ。》

「どんな？」

《たんぽぽとかオオバコとかトリカブトとか》

シャルペロは散歩中に見つけた薬草の生えている場所を時々教えてくれる。まだこの町の植生を知らないので非常に助かる。

たまに崖っぷちとか、よその敷地とか、到底採りに行けない場所のときもあるが、まあ良しとしよう。

採ってきてくれたらもっと助かるが、そこまでは私も期待していない。だってシャルペロだし。

「たんぽぽとオオバコは助かるわ」

たんぽぽの若葉はサラダにすれば美味しいし、葉も根も薬としてよく使う。オオバコもいくらあっても困らない。

「トリカブトも、あっても困らないけど……うーん」

トリカブトは毒草として有名だが、もちろん薬としても色々利用できる。できるんだが……やはり毒性が強すぎて使いどころが難しいから、私はあまり使わないのだ。

欲しくはないが、使うときもあるかも知れない。とりあえず採っておいて保存しておけばいいか。

《近くにビワの木もあったよ》

ビワ！　それは助かる。果実はもう遅いだろうが、葉が手に入れば十分だ。

シャルペロから詳しく場所を聞き出しながら、私は浮き浮きと明日以降の予定を考えた。

ある日、林の中、騎士さまに出会った

買い物の翌日、本当は古着屋に行くつもりだったが、採取作業の方を先に済ませてしまうことにした。

シャルペロに聞いた場所は町の入り口から程近い雑木林で、一応確認したら、特に制限もなく誰でも柴やら木の実やらを採りに来れる場所らしかった。

ざっと見た限り、お目当てのビワの木以外にも使えそうな木がいくつもあり、下生えにもめぼしい草が生えているのがありがたい。これからも、ちょくちょく来させてもらおう。

ウキウキと私は作業を始める。先にビワの葉を欲しい分だけ摘み取る。選別した葉は重ね合わせ、麻布の袋に丁寧に入れて手提げカゴにしまい、代わりに小さいシャベルを取り出した。

いくつかは根ごと持ち帰り、中庭に移植するつもりで用意してきたのだ。

そうやって根ごと持って帰るものを探しながら、葉や茎など取れるものは採取しつつ歩いているとオトギリソウの一群を見つけた。

「まだ花には時期が早いし、数が足りないなあ」

薬効が強く魔術特性もあるオトギリソウは需要が高く、もちろん私もよく使う薬草だ。道端でよく見かけるありふれた草でもあるのだが、おもに利用するのは花弁なのでやたら量がいる。今見つけた分だけでは、売り物にするにはまったく足りなかった。実家にいた頃

は敷地内で栽培もしていたから困らなかったが、これからは自分で確保するしかない。

自生しているものを捜し歩くのを想像するのも嫌だったので、私は一抱えもある麻袋に入った乾燥花弁をすでにギルドを通して買っていた。

一袋と聞くと多く感じるらしくエリアさんには驚かれた。だが普通に水で煮出して利用する以外に、私は自分で乾燥花弁を油で煮出した抽出油を作っているので必要なのだ。一般に抽出油も売っているが、たいていのものは薄められているので信用できないから。

どのみち花期はまだ先だ。結局オトギリソウはあきらめ、他にめぼしい草を探すことにした。

傷つけないよう丁寧に掘り出した薬草の根本を持参した麻布で包み、カゴに入れてから、次にたんぽぽの根を掘り出す作業に入った。たんぽぽの葉は採取したが、やはり根も欲しい。

たんぽぽの根は深い。途中で切らないように注意しながら、黙黙と掘り出し作業を続けた。そうやって幾つも根っこを掘り出しているとさすがに腰が痛くなる。

それでも我慢して掘り続け、けっこう時間がたった頃、ふと人の気配を感じた。顔を上げると青いマントと騎士服姿の騎士さまが立ち、私を見下ろしていた。

「なにをしているんだ」

「見てのとおり、たんぽぽの根を掘り出しております」

まだ若い騎士さまの眉間にシワが寄る。ああ、そういうことじゃない？　まあ一般的に雑草と呼ばれる草を必死に掘り出している姿なんて、普通は怪しむだろう。

「薬の材料になるんです」

「薬？　そんな雑草が？」

「たんぽぽは、胃薬やお乳の出をよくする薬の材料になります。これでも立派に薬草となります」

「そんなものをどうするんだ」

私は首を傾げた。どうするって言われてもねえ。

「材料がないと薬が作れませんので」

ますます眉根を寄せる騎士さまの、大きな切れ長の目が細められる。しかし背は見上げるほど高いが、細身で顔立ちも柔和なのでそんな顔をしても迫力不足でまったく恐くない。

ふわふわとしたその金髪巻き毛の印象のせいもあるかも知れないから、いっそ短く刈り込んだら威厳が出るのではなかろうか……とまじまじと顔を見ていたら思い出した。この人は、町に来た日に門番をしていた騎士さまだ。

「おまえは薬師か」

「いえ、私は魔女です」

たっぷり十数えられる間、騎士さまは黙り込んだ。

「魔女？」

「はい。魔女です」

経験は浅いが産婆の代わりも出来るし、薬師の役目も果たせる。私に出来ないのは占いだけだ。占者の才だけが私には絶望的にない。代わりに商才はあると父親には褒められたが。

「魔女……」

「ご存じありませんか」

あからさまに不審気な顔をしている騎士さまに、しゃがんだまま真っすぐ向き直り問いかけた。

「話だけなら知っている」

友人曰く、魔女の一般的認識は《魔法使いのように怪しい手技を使い、占いやまじないをし、怪しい薬を作る者》らしい。失礼なことに目の前の騎士さまも、そう思っているようだ。

「私は魔女の知識で薬を作り、商いしております。この町には先日参りました」

あなたに通していただいたんですけどね。

「商いの許可は得ているのか」

「店は準備中ですが、商業権は得ております。お疑いでしたらば、商工ギルドにお問い合わせください。私はミゼット通りのサララと申します」

「その若さで、随分と良い場所に店を構えるのだな」

「私には過分ですが、祖母の持ち物を譲り受けましたので」

言われるまでもなく、不相応は身に染みている。現在開店に向けて鋭意努力中だ。今も材料集めの最中なのだから、邪魔をしないでさっさと立ち去って欲しい。

そのあとも少し話をして、ようやく納得した騎士さまに解放された。まったく時間を無駄にしてしまったものだ。

使い魔

くだんの騎士さまのせいで採取を中断させられ、再び作業を再開する気もすっかり失せた私は、予定を切り上げて家に戻った。

早く帰ってきてもやるべきことは目白押しで、休む暇もなく持ち帰った薬草を中庭に植えたり、乾燥させるために土を洗い落として干したり、調合出来るぶんをすり潰したりと忙しく、あっという間に日が暮れてしまった。

ちょうどキリがよかったことだし、灯火の油ももったいないので、早々に夕ごはんを食べて寝支度をする。

今日は疲れたため行水はやめた。本当ならじっくりとお湯につかって汚れを洗い流したいところだが、何度も井戸を往復してお湯を沸かし、タライを満たすのは骨が折れる。お湯で顔と手足を洗い、体を拭くのに留めておいたが、それだけでもスッキリとして気持ち良く布団に入ることが出来た。

やはり風呂場は必要だ。つくづく増築できなかったのが悔やまれる。

我が家だけでなく大抵の家が風呂を設置しておらず、住人はタライで行水したり、町にある共同の浴場を利用している。

もちろんこの町にも共同の浴場はあるのだが、場所柄か探索者の利用が前提の男性専用が多く、女性も使える浴場が近くにないのだ。

あまり人には言えないが、店の経営が軌道に乗ったら、風呂場を増築するのが現在の目標だったりする。

《…もう寝なよ。なにブツブツ言ってるのさサララ》

シャルペロが顔を覗き込んできた。知らないうちに口に出していたらしい。

「散歩に行くんじゃないの？」

《サララが寝たら行く》

眠りを必要としないシャルペロには、昼も夜もない。行きたい時に、行きたいところへ、好きに出掛けていく。

「ふふ…。ほんとに猫みたいねぇ」

《精霊相手に失礼だなぁ》

「だって似てる……きっと姿を真似たから、似てきたのよ」

夢うつつに笑うとシャルペロが顔をしかめるのが見えた。

《サララが猫がいいって望んだから、猫になったんだよ》

使い魔となるのに具現化する必要があったシャルペロは、私の思考を読み取って最も私が望む姿をとったのだ。

「猫、かわいいじゃない」

祖母のお使いは鷹で、母のお使いはフクロウだ。

しかし魔女のお使いと言ったら、真っ先に浮かぶのは黒い猫だ。ただシャルペロの毛色がグレーなのは、たんに私の好みだろう。

「ずっと一緒なら、猫がいいもの」

手を伸ばし、そっと触れる。短毛なのに、シャルペロの毛並みはとても柔らかく心地好い。

《うん。ずっと一緒だよ》

使い魔は、父より母より近しく、死ぬまで側に寄り添う存在だ。

「……すぐ、どこか行っちゃうけどね」

《だって縛られてないからさ》

精霊を見ることが出来ない私は、本来なら使い魔と結び付くことが出来ないはずだった。

それでも精霊に好かれる質（たち）の私は、いつも精霊に纏い付かれていたらしい。

その精霊の中から祖母がシャルペロを選んで、使い魔となるよう仲立ちしたのだが、それは正式な形の誓願ではない。

そのため使い魔と従える者という閉じた関係でありながら、シャルペロは私に完全には縛られず身軽に振る舞え、私もシャルペロだけに縛られず、複数の使い魔を持つことが出来るらしい。いらないけどね。

「……最後に戻ってくるなら、どこに行ってもいいわよ」

まるで放蕩者の亭主と嫁みたいな会話だなと思いつつ、目を閉じた。

ひらひらとキラキラ

私が身につけているシャツとスカートは平民女性の一般的な服装だ。あえて特筆するとしたら、スカート丈が短いことだろうか。

童女の頃ならばともかく、成人に近づくとスカートは長くするものだから、ふくらはぎまでの丈まででしかないとなるとかなり短い。ただ童形と違い、素足を露出したりはせず、脚絆（きゃはん）を巻きつけてはいるが。

短いスカートに脚絆姿。これは決して特異なものではなく、一般的に農業などの労働に従事する女性がする服装だ。

農村部では珍しくもないが、町中でも市場に行くと露天商の農家のおばさんが身につけているのを見かける。

この短いスカートは動きやすく、脚絆も巻いていると足が疲れにくい利点があるのだが、私がすると童形にしか見えないのが難点だ。

先だってイルクさんと行った小間物屋の姿見で、どうにも子供っぽい自分の見目を確認して愕然としてしまった。

これは背が低くく、体型も肉付きが薄くて貧弱なのが原因だ。せめて胸や腰に、もう少し量感があれば、見映えしたのだが……こればかりは将来に期待するしかない。

とにかく実生活には便利なこの姿だが、店主が見るからに子供では体裁が悪かろう。これからは町中でも長いスカートを履いた方がいい。

……この際、子供が無理に大人の身なりをしているように見えないか、ということは考えないことにする。

そういう訳で、買い物をしながら数人の女性に聞き、遠いが一番評判がよかった古着屋に向かった。

この町は自然に発展したわけでないため、整然と区分けがされている。

私が店を構える町の中心部は、ダンジョン探索関連の施設や業種の商店が《魔封じの塔》を中心にぐるりと集まっている探索者のための区画だが、この辺りは町の住人の居住区に隣接した生活区画になる。

市場も食料品や日用品を扱う小売り店が軒を並べているせいか、歩いている人も一般の住人ばかりで、探索者の姿はほとんど見かけない。

まあ探索者は、宿と塔周辺をウロウロとするくらいなので、こちらにあまり用はないのだろう。

イルクさんに案内してもらった市場周辺を外れた横丁に、目当ての古着屋はあった。

その店は店主が女性で、女物が充実しているという。なんでも、ただ古着を手直しして並べているだけでなく、新たに仕立て直して販

売しているらしい。
主は若いが腕のいいお針子でもあるという、そのこじんまりとした店の扉を開けたら……そこは混沌たる別世界だった。
私は店に入った途端に入ったことを後悔するという経験を、再びしてしまった。

「うわあ……」

そこは私が知っている古着屋とは、あまりに違っていた。違いすぎて異空間としか思えなかった。
一言で言うと色彩の洪水。あまりにも多彩過ぎて、目に痛い。
欲しかったシャツとスカートなどの庶民の普段着は一見しただけでは見当たらず、ローブのような晴れ着やら服飾小物、ビーズや刺繍に凝ったいつ着るのか疑問に思うような派手なもの、さらには時代がかった芝居の舞台衣裳染みたものばかりが目に入る。
店内に吊された様々な衣装はすべて女性物だったが、いかにも綺羅綺羅しくて私の嗜好とは掛け離れており、欲しいものはない。
女の子がみんなキラキラひらひらとしたものを好きなわけじゃない。
私の母はこういうのが好きだが、私はもっとあっさりと簡素なものが好きなのだ。

たとえ晴れ着でも刺繍は少なめ、ビーズも控えめでお願いします。色も地味だと言うことはありません。

……なんというか、ここにずっといると頭が痛くなりそうだ。そうそうに退散したいです。

この店は遊里区画に隣接しているから、花柳界のお姉さん方が得意客なのかもしれない。そう思えば華やかな衣装ばかりなのも納得がいく。

しかしそういった派手派手しいものには用はない。私が欲しいのは普通のスカートだ。

落ち着いた店の外観に期待が膨らんでいただけに、裏切られたような気持ちになって、げんなりとしてしまった。

これはまた外したなと思ったものの、すぐに帰るのも面倒だ。気は進まなかったが、ざっと店内を見てまわることにした。

そうして見回すと、陳列台の隅に地味な一角を見つけた。

オアシスを見つけたような気分でほっとして近づけば、そこは普段着るような普通の服が畳まれて並んでいた。その手前には、『どれでも５０スー』との札がついた大きなカゴが置かれている。

覗いてみるとカゴの中には、地味だったり逆に派手過ぎたりとあまり一般的でない服ばかりが入っていた。

値段が安いこともあり、期待しないでいたが、手に取って見て驚い

た。
どうせゴワゴワとした麻や毛羽立った毛織だと思ったらとんでもない。使われている生地はどれも上等の亜麻布や、さほど傷んでいない毛織物だったのだ。
これなら５０スーは、決して高くない。
私はカゴを物色して、毛織のくすんだ赤いスカートを見つけ出した。これなら生地が薄いので、これから暑くなる季節でも大丈夫だろうスカートを手に取って当ててみると、ちょうど足首まで隠れるくらいの長さで、私には丁度いい。
私に丁度いい長さということは、一般的には短いということなので、ちょっと複雑な気分だが、売れ残っていてよかった。
多少ウエストが大きいようだが、これくらい直せばいい。そう思っていると店員に声をかけられた。
「気に入ったのは、あったかしら」
たぶん私より一つか二つ上だろう、愛嬌がこぼれるようなかわいらしい女の子だ。
「そこのはみんな半銀貨一枚よ。手直しするなら、さらに３０スーね」
合わせて８０スーか。手直し分を入れても新しく仕立ててもらうより、だいぶ安い。

「このままでいいわ」
「いいの？　あなた華奢だから、それ胴回りが大きいと思うけど」
私は背が小さい。
店員の女の子も小柄な方だが、私は彼女よりさらに頭半分くらいは背が低い。
それに彼女も言う通り骨格そのものが細いので、胴回りも比例して細い。
「これくらいなら、自分で直すから大丈夫よ」
直し賃に銅貨３０枚を追加で払うくらいなら、夜なべする方がマシだ。
そもそも嫁入り前の娘が、スカート一枚の手直しすら出来なくてどうするのだ。オマケに裾に刺繍だって入れちゃうよ。いや、普段着に刺繍はもったいないないか。
それから一枚だけでは心許ないので、畳まれて並んでいる中から焦げ茶色の薄手のスカートを選んだ。
それは見るからに丈が長かったが、単に詰めれば済むことなので迷わなかった。
切り落とした裾も端切れとして取っておけば、何かの役に立つかもしれないしね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0146w/

ぴんくの魔女 ～お店はじめました～

2011年12月17日09時49分発行